

書評 有馬孝禮著

なぜ、いま木の建築なのか (単行本) 223 ページ

出版社: 学芸出版社 (2009/4/30)

ISBN-10: 4761524588

ISBN-13: 978-4761524586

発売日: 2009/4/30

原田真樹 ((独)森林総合研究所 構造利用研究領域) 評

「木材」という材料を、将来に亘って持続可能な資源として確立するために何をなすべきか、本書はこのことについて考えるための書である。また、筆者の言を借りれば、『今までの常識をいったん置いて、「もうひとつの木材を考える」きっかけとなる』本である。

従って、知識を体系立てて説明する教科書というよりはむしろ、著者の考え・哲学を盛り込んだ啓蒙書、といった方が位置づけとしては適当であろうか。

本書は、大きく分けて、第1章:日本の木を知っていますか、第2章:木の「強い」「弱い」とは、第3章:木材・木造とのつきあいは水とのつきあい、第4章:ストックとしての木造建築、第5章:育てて使う連携、第6章:地球温暖化防止対策における森林・木材・木造、の6つのパートから構成されている。各章の概要は以下の通りである。

第1章は、スギを例に挙げ、木材の物性や特性、及び、その特性を活かした生活について議論されている。第2章は、木材の強さをテーマとして、『「決める」と「決まる」の違い』という観点から議論が展開されている。最近の情勢に対する意見、『「誰にもわかるように単純に」といわれることが多い。そのことはもちろん大切である。しかしながら、一律的な基準や知識をふりまわすことは問題が多い。』には考えさせられた。第3章は、木材と水の関係、特に「乾燥」に関して議論が展開されている。ここで読者は、次の質問、「乾燥割れした材は弱いのか」、「そもそもどうして乾燥するのか」、に対して自信をもって答えることができるであろうか。本章には、この問い(疑問)に対する答が随所に仕掛けられている。また、「業」における木材と乾燥に関連して、乾燥材と未乾燥材の価格設定に関する考え方、すなわち、『乾燥材を標準価格とし、乾燥をさほど必要としない材もあるので未乾燥材は用意し、価格を引く(乾燥をオプションにしてプラス価格としているのと全然意味が違う)』というくだりは、なるほどと頷かされた。第4章は、中古住宅市場を中心として議論が展開され、『中古住宅の評価に「時の年輪」を実績として上乗せする』という考え方や、既存木造住宅の長寿命化と森林環境の整備との関係、『(住宅の内装材に木材を使いたい7割、実績1割)』の調査結果から何をくみ取るか、といったことが述べられている。そのなかでも、住宅の長寿命化→2世代に亘る住宅保有→住宅ローンの負担減→浮いた資金をどう動かすか、という議論の展開は非常に興味深かった。さて、ここで読者に質問、「新築住宅と築後十年経た中古住宅が同じ価格だとしたら、あなたはどちらを選びますか?」これに対する筆者の考えは、『中古住宅は住いとして問題となるころはすでに解決されているので、新築住宅に比較するとはるかにリスクが少ないから価格が高くて当たり前』であった。第5章では、循環型社会のなかでの木材利用について考えている。『景気策は資源やエネルギーを消費して浮揚するのでなく、循環型社会を目指して、ものを考え行動する人が得する仕組みでなければならない』という視点から、『「消費が生産を生む」ためへの努力の少なさ』を嘆き、木材産業を「地面より上の資源」

を使い、『資源を使用消費するが、その使用消費が資源を生産する産業への駆動力になる産業』でなければならないと位置づけている。『目的を理解した自己規制がなくなると結局新たな規制や運用を生む人間社会の脆さ』を憂い、『産業革命以来の狩猟の発想から「育てて、使う」農耕の発想への転換の必要性』について説いている。また、我が国の人工林について、蓄積は増えているものの更新のための準備が貧弱であること、さらに国産材の位置付けについては、『市場原理に追随するだけでなく、そこに環境保全、資源の持続性に視点をおいた建設的な動き』を起こす必要があると説いている。『現在、公共建築を始めとして日本中で、木造流行とも言えるが、その実体と、地域循環型の業としての仕組みはどこまで達成されたか?』、『鎮守の森、雑木林の問題とスギ人工林や山村の問題の違いを理解し、それらを共に都市の問題としてとらえているか、このバランスを問い続けるのが森林や木材に関係する人々の役割である』、『資源・環境保全をめざした施策や「まちづくり」の原点は地元の木材資源を生かすこと』などは、耳の痛い方も多いのでは無からうか。このような状況に対し筆者は、『木質残廃材として扱われている問題は廃棄物・ゴミ問題ではなく、資源・エネルギー問題』であり、『資源は資金のある方に移動するが、ゴミはタダの方に移動する』こと、そして、『循環型社会はモラルによって支えられる。しかし、モラルを持っている人が利益を得るような仕組みをつくらないといつまでも正直者が馬鹿を見ることになる』という観点から、『新材購入時に処理費と資源費を前もって払っておく一種のデポジット制の導入』という画期的な提案を行っている。第6章では、地球温暖化防止条約・第2約束期間へ向けて木材利用が進むべき方向について議論されており、炭素放出量の計算例を提示しながら、『生物資源といえども再生産ができなければ二酸化炭素放出ゼロを担保できない』こと、『炭素固定から燃焼までの時間が短い（耐用年数が短い）ものはそれを生産するための必要面積が多くなる』と、短絡的なバイオエネルギー信仰に対して警鐘を鳴らしている。『生物資源のリサイクルは再利用、再生利用、エネルギー利用などの資源化であって、他の資源でみられる廃棄物処理対策ではない』のである。

さて、本書を読破された各位は、改めて「なぜ、いま木の建築なのか」、また、真の資源循環型社会の実現のために木材関係者（林業界、木材産業界、建築業界、研究者）がそれぞれ何をなすべきか、ということをしつくり考えていただきたい。おそらく、各人各様の意見があると思う。本書を介して、この問題について読者同士が議論する、そのきっかけづくりもまた、筆者の意図したところではないだろうか。

本書は、斜め読みのできない本である。木材を取り巻く種々の問題について、筆者が極めて公平かつ冷静に現状分析を行っているため、一つの問題に対して何通りかの答えが用意されていることが多いからである。木材に対する考えや思い入れは人それぞれあると思うが、いまいちど筆者の姿勢に倣って、改めて周囲を見渡してみることも必要なのではないだろうか。

原田真樹（(独)森林総合研究所 構造利用研究領域）評